

M-GTA 研究会 Newsletter no.10

編集・発行：M-GTA 研究会事務局（自治医科大学看護学部水戸研究室）

メーリングリストのアドレス：grounded@ml.rikkyo.ne.jp

世話人：岡田加奈子、小倉啓子、小嶋章吾、斉藤清二、佐川佳南枝、林葉子、水戸美津子、福島哲夫、坂本智代枝、木下康仁

第 32 回 研究会の報告

【日時】 2005 年 7 月 30 日(土) 13:00~18:00

【場所】 立教大学（池袋）10 号館 2 階 x203 教室

【参加者（敬称略）】

水戸美津子（自治医科大学）、小倉啓子（ヤマザキ動物看護短大）、林葉子（日本医療機能評価機構）、佐川佳南枝（西川病院）、林裕栄（埼玉県立大学）、松井由美（大正大学大学院）、徳永あかね（神田外語大）、村上律子（神田外語大）、古屋昌美（山梨県立看護大学大学院）、市江和子（日本赤十字豊田看護大学）、新鞍真理子（富山医科薬科大学）、大島寛子（山梨県立看護大学大学院）、松戸宏予（筑波大学大学院）、長住達樹（国際医療福祉大学）、鹿野裕美（仙台市立松陵中学校）、西能代（千葉大学）、荒井きよみ（千葉大学）、升井恵美（専修大学大学院）、都丸けい子（筑波大学大学院）、樋口香織（名古屋大学医学部保健学科）、黒岩靖子（佛教大学）、宗村弥生（東京女子医大看護学部）、掛本知里（東京女子医大看護学部）、石田多枝子（海老名市青少年相談センター）、渡辺千枝子（松本短期大学）、田尻明美（目白大学大学院）、福島哲夫（大妻女子大学）、松繁卓哉（立教大学大学院）、石垣真理子（香川大学医学系研究科）、坂本智代枝（大正大学）、京須希実子（東北大学大学院）、荒井昭子（名古屋市立大学病院）、柴田佳夏（早稲田大学日本語研究教育センター）、藤田奈緒（穂波町役場・福祉課）、鳩山淳子（山口大学）、納富史恵（久留米大学）、藤丸知子（久留米大学）、寫末憲子（埼玉県立大学）、山井理恵（明星大学）、藤丸千尋（久留米大学）、佐鹿孝子（昭和大学保健医療学部看護学科）、石倉裕美（大正大学大学院）、塚原節子（富山医科薬科大学）、藤田みさお（東京大学大学院）、有本梓（東京大学大学院）、安藤悦子（長崎大学医学部保険学科）、阿部康子（愛媛県内子高等学校）、荒木大輔（大正大学大学院）、隈谷理子（株：アドバンティッジリスクマネジメント）、木下康仁（立教大学）の計 50 名

【次回の研究会のお知らせ】

日時： 第 33 回 2005 年 11 月 12 日（土） 午後（13:30-18:00 を予定）

場所： 立教大学（池袋キャンパス）教室は後日お知らせします

【2005 年度公開研究会のお知らせ】

日時： 2005 年 12 月 3 日（土） 午後

場所： 久留米大学（福岡県）…プログラム、懇親企画などは後日、お知らせします

【研究報告 1】

認知症高齢者を在宅で介護する嫁の介護意識の変容

松本短期大学 渡辺千枝子

1 発表の要旨

- 1) 研究テーマ：在宅介護を継続するために、認知症高齢者を介護する嫁の意識変容のプロセスを明らかにし、看護実践に生かす方向性を見出す。
- 2) 現象特性：夫の認知症の老親を介護している嫁が、身内を始めとする社会と相互関係を持ち、介護の負担感を抱えながら介護を継続させようとするプロセス。
- 3) 分析テーマへの絞込み：嫁が夫の認知症の父母を在宅で介護し続けるために、介護することを自ら納得させていくプロセス。
- 4) 分析焦点者：認知症の夫の父母を在宅で介護する嫁。
- 5) データの収集法と範囲
(ア)対象者：在宅で夫の父母を2年以上介護する嫁7名
(イ)期間 平成16年5月～9月
(ウ)場所 面接は、7名中6名は介護保険施設またはコミュニティセンターの個室で行い、1名は、本人の希望により本人宅で行なった。
- 6) カテゴリーの生成：17の概念と6つのカテゴリーを生成した。
- 7) ストーリーライン：[]概念、<>カテゴリー。

嫁は、夫の親を介護する現実に遭遇した時、嫁が介護することに「とうとうその時がきた。」というような、結婚当初、あるいは、それ以前から感じていた嫁が夫の親を介護するのは当たり前という「嫁のわきまえ」が現実になったと考える。また、それと共に、自分は自分の親と同じように夫の親に「恩返し」という「わきまえの表出」を自覚することによって介護を継続させようとする。自分の健康を害したり、自分のやりたいこともがまんしながら「この状態がいつまで続くのか」といった、漠然とした不安と、嫁が親の介護を行うのが当然であるという社会規範にとらわれながら、だめな嫁と言われたくないという一心で「使い分けて解放する」術を得ていく。つまり、社会資源を活用することに対しても正当化しながら「社会資源による支え」を「使い分ける」生活をする。また、悩みを自分だけの胸に中におさめず、周囲の人に介護の悩みを打ち明けるが「専門職とのやりとり」は、悩みの解決につながるが、他の人には理解してもらえないという印象をもちながらも、自分の精神的な「つかの間の解放」感を得ている。生活というものが、小さなことの積み重ねであると考えられるので、この小さな解放の積み重ねが介護の継続につながる。老親の妄想や徘徊・攻撃等の症状にも、正気ではないのだと「相手の世界を知る」ことや、他の嫁の体験と「比較して安心」し、過去の自分の状況と「経験の中の比較」をして「今の自分はまだいいほうである」と「もちこたえる」努力をし、「動揺の沈静化」を図る。今までは、夫の親は自分より優位に位置する存在であったが、認知症や病気を契機に「頼られる」自分を意識し、「私は、勝ったと思いました。その時、すごく気

が楽になりましたね。」といった[関係性の転回]に気づく。これらの嫁の意識の変化は、自分のニーズを優先する生活に[切り替える]ことができるようになり、今までがまんしてきたのだから自分の仕事や趣味等自分のやりたいことをやりながら[人生の帳尻を合わせる]ように<転回する>ことによって介護の継続意思を賦活化している。さらに、周囲の誰かが自分のことを認めてくれることを[介護のエネルギーの原動力とする]こと、自分が介護することによって家族のつながりを意識でき[報われる]と感じ、認知症の親と同居することによって、[経済的な見返り]があると考えることが介護を継続するエネルギー源となる<推進力の獲得>につながる。

8) 論文執筆前の自己確認：この研究で何を明らかにしようとしていたのか。

介護負担は先行研究からも大きいことは明らかである。在宅介護を継続している嫁と継続できない嫁がいるが、その中で継在宅介護を継続している嫁の意識は変化しているのか。という Research Question から、研究をスタートさせ、介護する嫁の意識の変容を明らかにしようとした。

2 質疑

1) 渡辺自身の未解決部分

(1) 嫁のわきまえ概念は、今回の研究した地域に限定される意識としてとらえられるのか。

- ・嫁を対象とすることでは共通点のある研究をしているが、都心の一定地域を除いて、嫁の役割意識をもっていると考えられるので、地域性ということは考えなくてよいのではないか。(嫁の役割に関しては、春日キヌヨ氏の文献が参考になる。)

(2) 嫁のわきまえ、恩返しの両概念の意識の変容を臨床場面で実践するというのは、自分の中でもイメージできにくい。

- ・ジェンダーその他を考えても今の時代にこれらのことを積極的に求めるという方がむしろ不自然であるため。そういう感情を認めてサポートすればよいのではないか。

2) 研究会の方の質疑・コメント

(1) 結果図がバルーンというのはおもしろいが、その反面、バルーンは閉鎖的なものになっており、意識の変容は、外部との関わりによっても生じてくるので、矢印の位置も含めて検討してみたらどうだろうか。

(2) [嫁のわきまえ]において、介護するのが当然という伝統的な役割とうまく同一化できて適応する人と一方では嫁だから介護しなければというプレッシャーになるものがあるのではないか。

(3) 夫の支えというものは概念にないが、データからでてこなかったのだろうか。→誰かに認められることが必要であるというものがあり、その中に夫というものがあつたが、それら認めてくれるというものを[報われる]概念にいれた。

(4) 支える会等、同じ環境にいる人たちに支えられる(ピア)というものはデー

タに出てこなかったか。→専門職や関係ない人誰にでも話をしたというものはあったが、その類のことは出てこなかった。(介護者自身が介護者の会に連続して出席ことが難しいという現実があることも理由のひとつと考えられる。)

3) 木下先生のコメント

- (1) 何故「嫁」なのか、何故「認知症」なのか明確に説明できなければならない。
- (2) コアカテゴリーはどれか。コアカテゴリーは、これによって何がどう変化するか、簡潔に即説明できるものでなければならない。
- (3) バルーンの結果図にも問題があると考えられる。(1)と同様に何かの変化がわかるように説明できなくてはならない。
- (4) 分析テーマが「自らを納得させるプロセス」であるが、何を納得させるのか、そうするとどう変わるのか。納得させる何かがあって、そうするとどのように状況が変わるのが説明できなくてはならない。
- (5) 概念名をみると、一般的であり、これが嫁介護者という限定のものではない。
- (6) <転回する>がカテゴリーというより、概念[関係性の転回]がコアカテゴリーであると考えられる。

3 感想

今回研究発表の機会をいただいたことを深く感謝いたします。自分では納得しながらやっていたはずだったものの曖昧さ、無意識のうちに目をそむけていたものが浮き彫りにされ、もう一度データを見直し、分析テーマを緻密に考える必要性が明確になりました。そしてさらに、結果図を自分の考えにフィットするものにしていきます。今回の発表によって、研究の厳しさを再確認し、研究を再考する勇氣という大切なものを得ることができました。今後もよろしくお願いいたします。

【研究報告 2】

小学校通常学級に通う二分脊椎症児の導尿介助をする母親の、
子どもの発育発達に伴った存在意味変容プロセス

千葉大学大学院教育学研究科 修士課程 西 能代

1. 発表要旨

1) M-GTAに適した研究であるか

二分脊椎症児の通常学級における就学は、教職員と母親、周囲の児童との社会的相互作用が働く場である。教育の領域であり、実践現場に還元し、能動的に応用することが可能である。また、母親の感じている子どもにとっての自己の存在意味は、子どもの発育発達等によって、プロセス性を持っていると考えられる。これらのことから、本研究はM-GTAによる分析が適した研究であるといえる。

2) 現象特性

二分脊椎症の子どもは定時導尿が必要である。導尿は医療的ケアのため、自己導尿法を習得する以前の児童の日常の学校生活における導尿の多くは、母親によって実施されている。

自己導尿の確立は、社会的に自立するための重要なステップであり、小学校時代は、母親の介助を必要としながらも自立へのステップを取得する重要な時期といえる。

二分脊椎症の子どもは、母親への密着が強く、母親から自立する過程が通常と異なっていたり、妨げられている可能性がある。子どもが思春期に向かうにつれて母親役割の葛藤が生じるとされ、子どもにとっての母親の存在意味が変化し、揺らいでいく時期であると考えられる。

以上のことから、二分脊椎症の子どもの自立のためには、学校生活における子どもの導尿ケアを通した母親の役割や存在意味の変容を捉えて、母親と子どもの学校生活を支援していく必要があると考えられる。

3) 分析テーマへの絞込み

小学校通常学級に通う二分脊椎症児の導尿介助をする母親の、

子どもの発育発達に伴った存在意味変容プロセス

4) データ収集法と範囲

対象: 関東在住の小学校通常学級に通学中および通学経験のある二分脊椎症の子どもの母親

方法: 当事者団体を通して調査依頼者を行い、承諾を得られた16人に半構造化面接を行った。

5) 分析焦点者の設定

小学校通常学級に通う、もしくは通っていた二分脊椎症の子どもの母親

6) 分析ワークシート

7つの概念を生成し、分析ワークシートを提示した

7) カテゴリー生成

7つの概念から、4つのカテゴリーを生成し、提示した。

2. ワークショップ

1事例の生データの一部抜粋を提示し、概念生成のワークショップを行った。その結果、5つの概念が仮説として生成された。しかしながら、データに基づいた分析テーマが問題となった。

3. 質疑応答

1) 解釈するものの立ち位置は分析焦点者か分析者か？

分析焦点者から距離を置いて、分析者が焦点者の気持ちを解釈していくのが適切である。

2) 分析テーマがデータの内容とずれており、フィットした設定になってない。

① 存在意味

存在確認というかなり重たい内容が分析テーマにはいつてきてしまっている。

② 時間軸

母親の設定している時間軸は、子どもの発育発達に伴ったものより、学校制度や病気の状態など、別に細かく設定されているのではないか。分析時に検討すべきである。

③ 導尿

重要なポイントである導尿がデータからでてきていない。その子の生活がどこで導尿を中心とした事柄でしぼられていくのかという展開ではないか。現象特性のイメージの中で参考になる。

⑤養護学校での経験の扱い

養護学校での体験がプロセスとしてでてくるのは、どう考えるか？→入院時の短期的な養護学校在籍であり、自己導尿の自立の面でみると、変化を体験されていることの方が大きいと考えている。

⑥何のプロセスに関心があるのか？

→自己導尿が確立するまでの、学校現場で母親の存在意味。

導尿できなかった子が出来るまでのプロセスの中でのお母さんの役割と考えるとわかりやすい。

⑦二分脊椎症に注目した理由は？

→通常学級に通う医療的ケアの必要な子に視点を置いている。

発育発達に伴った視点から考えると、導尿は特に親でもみられたくないものなので、より子どもの自立に直結し、親との分離について分かり易く見られるケアではないか。

⑧母子分離

子どもが自立することによる母親の存在危機が前提となるのか、母親の役割・関係変化のプロセスか？→母親の役割変容を考えていた。

導尿できるように行動を起す母親の気づきや関わりのプロセスに注目するとよい。母子分離の問題とすれば、性別などの子どもの属性によって、自立のきっかけが見えてくる。母親の、危機感を持ちながら子供と接している複雑な思いや気持ちを子どもの学校生活における発達と絡めていったら、グラウンデッドセオリーが面白い。もっとデータを深く読み込む必要がある。

⑨性

異性の子どもに対して母親に違和感がないというのは密着しているためと考えられる。

3) 今後の課題

何と何の比較かをはっきりしながら、比較の視点を入れて考えると、解釈がぶれなくて、確認しながら進めることが出来る。人を単位としての理論的サンプリングしながらすれば、高レベルなリサーチになる。分析テーマを、自分の問題意識は妥協させなくて、データの内容とマッチするところを考える必要がある。

4. 感想

今回、研究会で発表する機会をいただきまして、本当にありがとうございました。

ワークショップで皆様の概念の生成される過程におけるデータへの注目の仕方、思考する道筋に触れさせていただき、大変参考になりました。ただ、皆様に考えていただけたということで、自分でも概念生成になかなか生かせないデータを提示したため、混乱を来たしてしまいました。皆様の概念と自分の概念との比較まで進まず、せつかくの貴重な機会を十分機能させることが出来なかったと反省しております。

最終的には分析テーマの絞りこみの検討となりましたが、その作業がどれだけ重要であるかということがわかりました。皆様から、本当に貴重なご示唆をいただけたと感謝しております。非常に

密度の濃い時間をいただきました。皆様のご指摘を踏まえ、データを見直してよく読みこんで、分析作業を進めていきたいと考えております。ありがとうございました。

~~~~~

#### 【構想発表 1】

##### 短期内観を体験した学生の自己理解の進展 ～社会福祉専門職の資質向上のために～

佛教大学社会福祉学部 黒岩 晴子

#### 1, 要旨

これまで行ってきた内観を活用した教育実践に基いている。社会福祉教育における内観の活用が、対人援助専門職に求められている資質向上のために、知識、技術、倫理の基盤となる自己理解を助ける方法として機能しているのか、学生の体験の過程を分析し、考察を試みたい。教育課程の中では、自己を知る機会として様々な提示を行っているが、今回は特に2泊3日の短期内観の体験に焦点を当てる。

なお、内観の基本である集中内観による先行研究は多く、教育現場における記録内観、教室内観等の実践報告も行われているが、社会福祉教育領域における2泊3日の短期内観を活用した教育実践についての報告はほとんどない。そこで、今回の分析は短期内観体験に焦点をあてる。

#### 2, 質疑

- ・ 内観の先行研究が多い中で、特に社会福祉分野での研究の目的は何かを明確に
- ・ 専門職の資質向上にはさまざま自己理解の方法があるが、一般の方法等との違いは
- ・ 概念作成では「母を媒介としての自己像の変化」等、媒介という言葉を使用しても良いのでは
- ・ 問題行動が多い学生に対し、通常のカリキュラムでは行いにくい事があるが、このように別の装置で取り入れる方法は意義があるのではないか
- ・ 実習教育などで利用者を通して振りかえる視点を取り入れてはどうか

#### 3, 感想

今回の構想発表に際しまして、ご質問やご意見等を頂戴し、多様な視点で検討すべき課題に気づくことができました。社会福祉専門職の教育実践については、内観学会等への発表を通して検証の機会としてきていましたが、それは実践報告としてのものでした。これまでの実践の整理として、受講生の気づきへのプロセスを理論化し客観的評価を行う課題を持っておりました。今後は実践の理論化とその評価の手段としてM-GTAを活用し、さらに受講生に役立つ実践をすすめたいと考えています。

なお、発表時は緊張していましたので、ご質問に対し適切な応答が出来ませんで、大変

申し訳ありませんでした。その後気づいたことも含めて今後の研究に生かして参りたいと存じます。貴重な学びの機会を頂き感謝申し上げます。

## 【構想発表 2】

高齢者の褥瘡予防における看護師の臨床判断に関する研究  
ー援助過程における臨床判断を構成する要素とその関連についてー  
山梨県立看護大学大学院看護研究科 古屋 昌美

### I. 発表要旨

1. M-GTA に適した研究か：ヒューマンケア従事者に焦点をあてたものであり、病院という特定環境においては、高齢者（患者）、高齢者の家族、看護師を含むコメディカルとが関わりあう場であり、社会的相互作用に関わる。高齢者の褥瘡予防の状態を継続しようと日常的に関わる看護師の臨床判断が、高齢者やコメディカルなどとの直接的なかかわりである臨床の看護実践の中で終始行われているという現象がプロセス的性格を持っている。また、本研究の結果が、臨床における高齢者の褥瘡予防方法を提示できる可能性があり、そして高齢者の褥瘡予防に関するスタッフ教育への指針を検討することにより、実践の場でその結果がさらに検証されていけるものとする。
2. 研究テーマ：高齢者の褥瘡予防における看護師の臨床判断に関する研究  
研究目的：高齢者の褥瘡予防の援助過程における看護師の臨床判断を構成する要素とその関連について明らかにし、褥瘡予防の援助過程における看護師の判断内容を基に、高齢者の褥瘡予防に関するスタッフ教育への指針を検討する。
3. 現象特性：医療施設でかつ療養型病棟もしくは回復期リハビリテーション病棟においては、褥瘡対策を講じることが義務付けられている（褥瘡対策未実施減算）障害老人の日常生活の自立度判定におけるランク B、C の高齢者が入院していることが推測され、さらに医療法において入院期間の短縮化が進む中、入院日数が 180 日前後もしくはそれ以上という時間軸においてある一定期間同一の場におり生活を送っている。その中で、高齢者の褥瘡予防の状態を継続するために看護師は日常的に褥瘡対策を講じており、高齢者に対するケアにおいて、看護師の臨床判断が臨床の看護実践の中で絶えず行われているという現象がある。
4. 分析テーマの絞込み：高齢者の自立に向けた褥瘡予防の判断のプロセス
5. データの収集法と範囲：医療施設でかつ療養型病棟もしくは回復期リハビリテーション病棟に従事する、経験豊かで褥瘡対策に関心がある看護師 10 名程度を対象。40 分程度の半構造的質問によるインタビューを実施し、事前に、『最近（ここ 1 ～ 2 年の間）の実践活動の中で、「高齢者の褥瘡予防の活動であると感じた体験」「褥瘡ができそうでできなかったと感じる事例」で、しかも良い結果をもたらすことの



できたと思う体験』を1例以上思い出し、自己の体験から選び、振り返って頂けるよう依頼。インタビュー内容を録音し、逐語記録化する

6. 分析焦点者の設定：医療施設でかつ療養型病棟もしくは回復期リハビリテーション病棟に従事し、褥瘡対策に関心のある看護師

## II. 質疑応答

- ・(発表者より) インタビュー実施前にボランティア研修を実施したが、研究計画書の段階では、ボランティア研修は本研究と別枠で考えていた。インタビューを行っていく中でボランティア研修で見聞きした場面を話の呼び水として対象者に話しをすることがあったが、このボランティア研修の位置づけをどのようにしていけばよいか悩んでいる。  
→倫理的な部分でなく、研修で観察したことをデータとしないとしてあるのであれば、インタビューの中に話がでてきたことに関しては、別枠のまま考えてよいと思う。
- ・臨床判断とはどのようなことか、判断のプロセスとはどのようなことなのか。臨床判断に関心があるのが分かるが、判断というのは漠然としている。
- ・今回の研究の起点はどこからどこまでなのか。
- ・褥瘡予防に関しては、マニュアルが多くあるが、それを活用するということが結果となってしまうのか。
- 現在インタビューを実施している中では、マニュアルを活用していくという話はなく、日常の看護の中で行っていることが結果的に予防に繋がっているという話であった。
- ・褥瘡に関する研究は多くあるが、このテーマで欲しいデータがとれそうか。褥瘡発生させない取り組みより、褥瘡発生しないように取り組んでいたにも関わらず発生してしまったケースに関し、看護師の判断だけではなく、病院の環境等焦点をひろげ、認識が違っていたとか、転換点にあるかもしれないということにならないか。
- ・この研究は、褥瘡が出来始めたことに気づくプロセスということではないか。
- ・予防であれば、プロセス性ではなく要素があがるのみになってしまう。気づきに至るプロセスを明らかにしようと考えているのではないか。予防をし続けているというイメージがわきづらいのではないか。

## III. 感想

今回、このような貴重な発表の機会を頂きまして、大変感謝しております。この場をもって深く感謝申し上げます。今回の発表、質疑を通し、参加された皆様からの貴重なご意見を頂く中で、研究テーマから再度見直していく必要性を感じ、未熟な点や曖昧な点が多々あることを痛感致しました。皆様からアドバイスを頂けたことを感謝いたします。今後は、アドバイス頂いたことを参考にしながら、木下先生の本を読み直し、研究テーマから再検討していきたいと考えております。今後ともよろしくお願い致します。有難うございました。

### 【構想発表 3】

小中学校教師の構成的グループエンカウンター研修への参加体験に関する研究

ーその教育実践と教師自身への影響を中心にー

福島哲夫(大妻女子大学)・石田多枝子(海老名市青少年相談センター)

これまで構成的グループエンカウンター（以下：SGE）の研究は多数されており、有効性が確認されている。しかしSGEを受講した教師がどのような体験を経てクラスで実施し、それがその教師の教育実践全体にどのような影響を与えているかということについての研究は少ない。

発表者らは教師への支援の一環として児童・生徒理解及び学級づくりを目的としたSGEの研修を平成10年より実施してきた。各教師がこの研修を体験した後に本務校で児童・生徒に実践するという目的での研修受講ではあるが、教師自身が研修を通して様々な体験を積んでいる様子が伺われた。教師がSGEの研修に参加し、クラスでの実施を通して、教師自身は何を学んでどのように変化したのかを明らかにし、その変化が教育実践に与える影響を検討していきたい。

#### <現在までの研究状況>

すでに10名の教師に対して半構造化面接を行い、3～4名のデータを元に分析シート・仮結果図にしている。

#### <今後の課題>

- ・ 自画自賛的な研究にならないためにはどうしたらいいか？
- ・ 分析ワークシートの各ヴァリエーションが長くなりすぎてしまう。
- ・ 教師の内的変化のデータがさらにとれるといい。

#### <研究会でのコメント>

コメントは主に今後のインタビューの仕方についてなされた。

- ・ 参加者の期待と反する結果や、想定違いのことについて詳しく質問するといいいのではないか。
- ・ 内面の変化に関しては、本人がなぜ変わったと思うかについて詳しく具体的に聞くといいいのではないか。
- ・ 繰り返して研修に参加しているのはなぜか、その意味は何なのかを聞くといいいのでは。
- ・ 「どういう場面で、どのように変化したのか」を具体的に聞くべきである。
- ・ 生徒像の変化に関しても、もっと詳しく具体的に聞くといいいのかもしれない。

#### <発表しての感想>

「内面の変化」や「視点の変化」などの心理学的テーマに関しては、よほど注意深くインタビューしないといいデータにならない、という基本の大切さを改めて痛感しました。

.....

【編集後記】

- ・ 酷暑の日々ですが、いかがお過ごしでしょうか。第 32 回の研究会の記録がまとまりましたので、お知らせします。発表者の皆さん、ご協力、ありがとうございました。今回も 50 名という大台の参加者でした。今後は発表者以外の方々の意見、感想も掲載していきたいと思います。
- ・ 今年に入って急に M-GTA への問い合わせをたくさん受けるようになりました。誇張ではなく、予想を超えた関心の広がりが見られ、技法としての完成度を上げていく必要を感じています。とくに分析ワークシートによる概念の生成の仕方、概念間の比較検討からカテゴリーの生成、そして、コアかそれに近いものの見極め方あたりの理解をよりいっそう明確化していきます。
- ・ 研究会でもこうした部分のトレーニングをもっとしっかりしていかなければと考えており、今回は西さんの報告で概念生成を全員で検討することをしました。ただ、データを読みながら解釈するので、時間がかかります。研究会の限られた時間の中でどのように行うのが効果的か、工夫が必要です。
- ・ 関連してですが、この研究会は会員参加型の運営を旨としています。受身だけの参加は想定していませんので、何を学びたいか具体的な要望を期待しています。ML に直接アップしていただいても結構ですし、世話人個々に連絡いただいてもかまいません（まもなく会員名簿が完成します）。
- ・ 諸般の事情で次回は 11 月としばらく先になります。この間の時間を有効に使って、是非研究を進めてください。自分でやってみることです。
- ・ 最後にお知らせです。『看護研究』（医学書院）という雑誌が M-GTA の特集を増刊号ですることになりました。当初の予定より少し遅れていますが、9 月中には刊行されるようです。

(木下記)